

房総半島江見付加体中のデコルマン

Decollement zone in the Emi accretionary complex, Boso Peninsula

千葉 淳一[1]

Jun'ichi Chiba[1]

[1] 筑波大・院・地球

[1] Geoscience, Tsukuba Univ.

房総半島南部、鴨川市江見付近に露出する中新統保田層群青木山層は、変形様式およびその組み合わせから付加体であるとされている（例えば斎藤ほか、1992、東北大核理研報告、小川・石丸、1990、地学雑誌など）。この付近はタービダイトと思われる砂岩および砂～シルトサイズの凝灰岩が、スメクタイト類粘土鉱物および珪藻の破片を含む泥質なバックグラウンドにはさまれる岩相である。構造的には、層理面に平行、または低角で層理面を切る、粒子破壊をともしない断層によって同一の地層が繰り返す（いわゆるデュプレックス構造をなしていると思われる）比較のコヒーレントな部分と、砂岩や凝灰岩のタービダイトがブロック化して泥質なマトリックスにとりかこまれるいわゆるメランジュ状の部分がある（Chiba&Hirono、投稿中）。コヒーレントな部分では、特に砂岩中に、（おそらくは液状化による）初生的堆積構造の消失、コンポリューション、ディッシュストラクチャー等の脱水構造のほか、カルサイトのベインも頻繁に見られる。メランジュ状の部分の砂岩・凝灰岩のブロック中にも同様の構造が見られ、これらはブロック化する以前には同様の構造的環境に合ったものと考えられる。またマトリックスをなす泥岩にはいわゆるスケリーファブリックが発達する部分があり、おそらくはその部分に歪が集中しているものと思われる。この組織は粘土鉱物の定向配列によって平滑な面が形成されたもので地層の層理面に平行または亜平行な2ないし3方向の面構造からなっている。定向配列面以外では泥粒子はランダムファブリックに近く高解像度のSEM観察によると数 μm サイズの間隙を保持している。これはODPのコアにおいて、同様のスケリーファブリックが観察されたバルバドスのデコルマゾーン付近で孔内計測によって静岩圧の90%に達する高間隙水圧が観測されたこと、また同じく今年の Leg190 における南海トラフのデコルマンのサンプルでCT値のばらつきが大きい（密度が狭い範囲でばらつく）こと（氏家ほか、地質学会107年学術大会予稿集）と考え合わせると、付加体基底部の泥質な部分に発達するデコルマンに特徴的な状態を表す組織であると言える。これらに加えて、マクロな構造もメランジュ上であること、隣接部に、スラストシートをなしていたと思われる側方短縮を受けたことを示す地質体（コヒーレントな部分）が存在することなどからも、この部分が付加体基底部のデコルマンであったことが結論される。